

緊急人道支援学会 ラウンドテーブルセッション 新しいシリアと人道支援

■ 要旨

2024年12月にアサド大統領退陣という急展開を見せたシリアの今後について、復興・人道支援の視点から課題を概観する。

かつてパレスチナ、レバノン、ヨルダンやトルコの一部も含んでいたシリアは、紀元前から続く長い歴史を持ち、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の発祥に関わる地であり、交易が栄えた地域で、今のシリアの首都ダマスカスは「世界最古の都市」とも言われる。人の往来も多く、「多様性」もまたシリアの特徴であった。第二次世界大戦後の1946年にフランスから独立、1971年からハーフィズ＝アサド元大統領が、2000年からは次男のバッシュール＝アサド前大統領が政権の座を独占した。2011年3月、民主化を求める市民のデモに対するアサド政権による武力弾圧を機に反体制派との激しい武力闘争となって以降、他国の代理戦争の様相も呈し、国民の約半数が国内外に避難した。また、「イスラム国」の樹立と崩壊、経済制裁による不況、2023年2月のトルコシリア大地震も相まって、多くの人びとが過酷な状況に置かれたが、アサド政権下ではNGOによる人道支援も大きな制約を受けた。

2024年12月8日、シリアの反政府勢力「ハヤト・タハリール・アッ・シャーム(シリア解放機構: HTS)」が首都ダマスカスを制圧し、アサド前大統領はロシアに亡命した。シリア政府もHTSへの政権委譲に協力すると発表したが、現時点では、新政権がどのような政権運営をするのか見えていない。

アサド政権の終焉については、アサド父子による非人道的な人権抑圧からの解放が期待され、広く歓迎の声が上がっている一方、13年以上のシリア危機下に山積した問題への対応や、難民の帰還などはいまだ不透明である。政変からまだ日が浅いであることを鑑み、安易な結論を出すのではなく、シリアに関わる研究者、NGO、ジャーナリストによるそれぞれの情報・分析にもとづく意見交換を目的とする。

■ 略歴および発表内容

【ファシリテーター】

内海 旬子

特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン 海外事業部中東地域マネジャー

「シリア国内で実施した緊急人道支援」

【コメンテーター】

三浦 徹

お茶の水大学名誉教授

「内戦まえのシリア社会」

伊藤めぐみ

ライター、ディレクター

「アサド政権崩壊後のシリアを訪ねてー宗教と13年の傷跡ー」

松永晴子

特定非営利活動法人国境なき子どもたち プロジェクトマネージャー

「難民の子どもたちをめぐる教育の課題ーヨルダンの事例をもとに」

■ セッションの流れ

1. 趣旨説明:内海(5分)
2. 「内戦まえのシリア社会:1万年の歴史から」三浦徹(15分)
3. 「アサド政権崩壊後のシリアを訪ねてー宗教と13年の傷跡ー」伊藤めぐみ(15分)
4. 「難民の子どもたちをめぐる教育の課題ーヨルダンの事例をもとに」松永晴子(15分)
5. 「シリア国内で実施した緊急人道支援」内海旬子(10分)
6. 発表者間でのQA(10分)
7. フロアに開いたQA(20分)